

<幼稚園教育>

心豊かな幼児の育成をめざした援助のあり方

—保育カンファレンスを基にした幼児理解と自然環境や援助の工夫を通して—

南風原町立南風原幼稚園教頭 翁 長 麗 子

内容要約

保育カンファレンスを基にして幼児理解を深めるとともに、自然環境や援助の工夫を図った。また、ティーム保育を行うことで活動の各場面においての幼児の気づきや発見を受け止め、共感し、疑問を投げかけたり、全体に広げたりする援助を行ってきた。その結果、多くの幼児が自然環境に親しみ、触れ合うようになり、発見や驚き、感動を教師や友達と伝え合い、共感するなど豊かな心の芽生えが見られた。

【キーワード】 保育カンファレンス 幼児理解 自然環境の工夫 教師の援助

目 次

I	テーマ設定の理由	11
II	研究内容	12
1	豊かな心	12
2	自然環境とかかわって育つ豊かな心	12
3	幼児理解	12
4	豊かな心の育ちを促す教師の援助	13
5	自然環境構成の工夫	14
III	保育実践	16
1	活動名	16
2	活動設定の理由	16
3	保育の目標	16
4	保育の視点	16
5	検証保育と保育カンファレンス	17
6	本時の保育展開	18
7	保育の視点の検証	19
IV	研究の考察	19
1	幼児の姿と教師の願い	19
2	幼児の変容と教師のかかわり	19
V	研究の成果と今後の課題	20
1	研究の成果	20
2	今後の課題	20

＜幼稚園教育＞

心豊かな幼児の育成をめざした援助のあり方

－保育カンファレンスを基にした幼児理解と自然環境や援助の工夫を通して－

南風原町立南風原幼稚園教頭 翁 長 麗 子

I テーマ設定の理由

幼児は日常生活の中でいろいろな体験を積み重ね、心身共に育っていくものであり、豊かな心は、豊かな生活体験の中から生まれるものである。幼稚園教育要領でも、幼稚園の教育は生きる力の土台づくりであり、生きる力の核となる豊かな心の育成について自然環境とのかかわりの重要性が述べられている。しかし近年、社会状況の変化で、遊びの内容もテレビやビデオを見たり、ゲームや市販の玩具で遊んだりする等、室内遊びが多く、戸外で自然と触れ合って遊ぶことが減少しつつある。豊かな心は、自然環境に親しみ、そこで得た感動を教師や友達と伝え合い、共感し合うことで芽生え、培われていくと言われている。そのことから、幼児の興味や関心が戸外に向くよう魅力的な自然環境を整え、豊かな出会いをさせることが大切である。

これまでも自然体験ができるように環境を構成してきた。飼育小屋を設置し小動物を飼育することで、入園当初、情緒が不安定な幼児が、動物とふれあうことにより安定してきた。池やその周辺の草花を整備することで小さな生き物がより多く生息するようになった。その中で虫に興味を示さない幼児が、オタマジャクシやヤゴと遊んだり、蝶の羽化を観察したりすることで、驚きや発見、感動を伝え合い、様々に心を動かし表現する姿が見られた。更に教師が幼児の発見や驚き、感動を大事に受け止め、共感することで好奇心の広がりや探求心の深まりが見られた。このような経験を通して美しいものに感動する心や思いやり等、豊かな心が育まれていく。

自然に対して興味や関心のある幼児は、積極的にかかわって活動しているが、反面、興味を示さない幼児も見られた。そのことは、これまでの戸外遊びの経験不足から自然の中での遊びの面白さに気づかないまま室内遊びに偏りがちになっていることが原因として考えられる。幼児が興味や関心を持ち、思わずかわりたくくなるような意図的、計画的な自然環境の工夫と幼児理解に沿った援助が十分ではなかったと反省した。

幼稚園教育においては、様々な活動をしている幼児を同時に援助していかなければならない。その中で教師一人で多くの幼児の行動を把握し内面を理解することは難しく、教師同士が日頃から連携を密にし、協力して幼児一人一人を捉えることが重要である。日々の保育について教師間で情報や意見を出し合い、保育カンファレンスを充実させることでより幼児理解を深め、適切な援助をすることができる。

そこで、多くの角度から情報や意見を交換しあい、保育の考え方を広げたり、一人一人の幼児を広い視野から捉えることの出来る保育カンファレンスを充実させることで、多くの目でより確かな幼児理解と自然環境の工夫を行ったり、援助のあり方を探りながら心豊かな幼児の育成を図りたいと考え、本テーマを設定した。

＜研究の視点＞

心豊かな幼児の育成をめざした保育カンファレンスを通して

- 1 一人一人の幼児理解を深める。
- 2 自然環境や援助の工夫を探る。

Ⅱ 研究内容

1 豊かな心

豊かな心は、幼児の興味や欲求に基づいた具体的、直接的体験や身近な自然環境とのかかわりを積み重ね、そこから得た感動を友達や教師と共有することや周りの人との様々なかかわりで高まり育つものとする。具体的には、次のような感性や心である。

- 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- 正義感や公正さを重んじる心
- 生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- 自立心、自己抑制力、責任感
- 他者との共生や異質なものの寛容

2 自然環境とかかわって育つ豊かな心

自然は、幼児の胸をときめかせ、興味・関心を誘う。幼児は自然に触れて遊ぶ中で心が癒されると同時に多くのことを学んでいく。動植物の飼育栽培の体験を通して生きているものへの温かな感情が芽生え、いたわったり、生命を大切にしようとするのを学んでいく。餌を与えたり、草花への水やり等の当番活動を通して責任感が芽生える。自然の事象や四季による動植物の変化からその雄大さや美しさ、不思議さ等を感じ取り柔らかな感性が育まれる。又、友達と一緒に自然環境にかかわることで、感動の共有が生まれ、考えの違いに気づき、自立心や自己抑制力、他人を思いやる心等が培われてくる。このように多様な自然体験を通して豊かな心が育まれていく。

3 幼児理解

(1) 幼児理解

幼児は、自発的な活動である遊びを通じて心身全体を働かせ、様々なことを経験しつつ理解力、言語表現能力、運動能力、思考力、社会性、道徳性などの多様な能力や性質について、相互に関連させながら総合的な発達を遂げるものである。幼児理解とは、このような発達段階や発達過程を、その内面から理解し、生活の中で幼児が示す発見の喜びや達成感を共感を持って受け入れることと捉える。そのためには、一人一人と直接触れ合いながら、言動や表情から、その幼児の良さや可能性、発達する姿、心の動き等を受け止め、理解しようと努力することが重要と考える。幼児を理解する方法は、客観的理解と主観的理解の2つに大別される。

① 幼児理解の方法

- 客観的理解・・・ 特定の個人的な理解から離れて普遍性を持った理解の方法である。つまり、幼児の行動やその行動のもとにあると考えられるものについての客観的事実を捉えることである。
- 主観的理解・・・ 保育者なりの理解の仕方ということになるが、保育にとって重要なのは、この主観的理解である。幼児の行動の中に含まれている心の声に、保育者が心から耳を傾けて、幼児の心の声を感じ取り、問題を発見する事である。しかし、このような理解の仕方は、ややもすると保育者の独断による理解になりがちなので、幼児を見る目を養うように努力すると共に、保育カンファレンスで他の保育者に理解してもらえるかどうか試みる方法もある。

また、幼児理解においては、個々と集団の姿を捉えることが大切である。幼児の集団としての姿と一人一人の姿とは、互いに独立したものではないので、全体を捉えていくことでかえって一人一人の発達やその子らしさがはっきりと見えてくる。

② 幼児理解の姿勢

- 一人一人のよさや可能性を捉える目をもつ
幼児の行動は教師の見方や接し方で大きく変わっていく。幼児の育ちつつある面やよさに目が向けられていると、安心して自分らしい動きができるようになり、興味や関心が広がり、意欲が高まっていく。
- 今、行っている活動がどんな意味をもっているか考える
幼児と生活を共にしながら、なぜこうするのか、何に興味があるのかなどを感じ取っていくことが必要である。目の前に起こる活動の流れだけを追うのではなく、周囲の状況や前後のつながりなどと関連づけて考えてみることで、心の動きや活動の意味が理解できるようになる。
- 触れ合いを通して発達する姿を捉える
発達の道筋のたどり方には、その幼児らしい特性がある。発達の様々な面の相互関連性や個別性のあることを理解し、触れ合いを通して発達しようとしている姿を読みとる目が必要である。
- 集団と個の関係を捉える
幼稚園は集団の教育力を生かす場である。集団の生活の中で、互いに影響し合うことを通して一人一人の発達が促されていく。一人一人の発達の特性を理解し、集団に生かすことを常に考えることが大切である。
- 保育を振り返り見直す
一日の保育が終わった後、その日の保育を振り返り、一人一人の幼児との触れ合いや様々な活動する姿をたどってみる。幼児を理解することは、すべて教師が自分自身の保育を見直し、改善するためのものである。

(2) 幼児理解を深める保育カンファレンス

一人一人の幼児をより深く理解することが、保育の出発点であるという考えを基本に保育カンファレンスを充実させ、幼児理解を深め援助のあり方を探る。

教師の考え方やかわり方が幼児の育ちに大きく影響を及ぼすことは言うまでもない。保育カンファレンスでの教師仲間の情報交換が、これまでの保育の考え方を広げたり、豊かにしていく。その中で他の教師が自分と異なった見方をしていることを知り、自分の見方について吟味し、保育の考え方を見直すことができる。そのようなことがお互いに幼児の見方、理解、援助のあり方などの経験を共有し、保育の専門性を伸ばし、高めることになる。

保育カンファレンスを充実させていくためには、次のようなことが大切になる。

- ものごとは本来、見る人の思いや立つ位置によっていろいろな考え方がある。基本的なことについては共通理解を重視しながら、正解や意見の一致を求めない。
- 自分自身の発見や成長のため、本音で保育を語ることを大切にする。
- 相手を十分に理解せずに批判したり、論争の勝敗を競うことをしない。共に保育を考えていくという姿勢を大切にする。
- お互いの成長を支え合い、育ち合うことを重視する。
- 議論の内容が全体に関わる場合は、十分な共通理解を図ると共に視点を定め、次回の保育カンファレンスの場で生かされるようにする。
- 近隣の幼稚園教諭との協力体制を築き、保育カンファレンスへの参加を求め、実践的指導力を高める。
- 指導主事や外部講師を招き、保育カンファレンスを実際に進めながら指導を仰ぎ、その充実に努める。

4 豊かな心の育ちを促す教師の援助

教師の援助とは、幼児の主体的な活動を大切にしながら、その心身の発達を十分に促すために教師が果たすべきことのすべてを指している。幼児の興味・関心に添いながら見守り、励まし、認め、共感しながら、満足感や充実感を味わわせることが大切である。

保育の展開において、自然環境とかかわる教師の姿勢は幼児にとって大きな影響を及ぼしていくものである。虫や花等に出会った時にどう触れるのか、さらに、飼育栽培で生き物の世話をどのようにしていくのか等について、教師の触れ方や世話の仕方から幼児が学んでいくことになる。教師が生命を大切にするかかわり方をすれば、幼児もそのようなかかわり方を身につけていくと考える。そのため教師は、自然環境とどのようにかかわっているかを常に振り返り、幼児のモデルとしてのかかわりを示していくことが大切だと考える。

豊かな心を育てるための教師の援助のあり方を次のようにまとめた。

豊かな心の育ち	教師の援助
○ 自然の不思議さや美しさに感動する心	・ 幼児の気づき、発見、感動を受け止め共感する。 ・ 感動を共有できる場をつくる。 ・ 四季を感じ取れるよう、自然環境を整える。
○ 生命の尊さに気づき、いたわったり大切にしようとする心	・ 教師自身が小動物の世話をしたり、優しい気持ちで接する姿を見せることにより、相手の気持ちや命の尊さに気づき、いたわったり大切にしようとする気持ちを育てる。 ・ 小さな虫と、遊んだ後や成虫になったら自然へ帰す等、優しい気持ちが持てるように気づかせる。
○ 飼育栽培活動を通しての責任感	・ 教師が動植物の世話をする様子を見せ、それと一緒に手伝ったりすることから、次第に幼児の手で世話ができるようにする。 ・ 当番活動で頑張っている姿を認め、励ます。
○ 物を大切にしようとする心	・ 草花、木の実、砂、水、土等の自然の大切さに気づかせる。 ・ 野菜の収穫を楽しみながら自然の恵みに対する感謝の思いが持てるように気づかせる
○ 気づきや発見から自分で試したり調べてみようとする積極的な態度や知的好奇心	・ 好奇心を誘発し、調べたり、試したりできるような環境を用意する。 ・ 絵本や図鑑と一緒に調べて、発見を共感し合う。 ・ 季節感のある遊びを取り入れて自然の変化に気づかせる。

5 自然環境構成の工夫

幼児の発達の姿をもとに豊かな心を育むことをねらいとし、次のような観点で考え、自然環境の工夫を図り年間計画の見直しをする。その際、保育カンファレンスを通してより充実した自然環境の工夫をする。

- ・ 現在見られる問題を、よりよい状態に変容させる。
- ・ 幼児から見られる望ましい動きを広げたり、それらを更に充実させる。
- ・ 幼児の変容に伴って生ずる問題を予防することによって、その変容をスムーズにさせる。
- ・ 四季の変化を考慮し、1年の生活の流れを予想し、計画する。
- ・ 長期の見通しに立った、幼児の望ましい変容を目指して方向付ける。

(1) 自然環境構成の工夫

自然環境	工夫した点
栽培	・ 観賞用の花、直に触れたり、取ったりして使って遊ぶための草花を栽培する。 ・ 昆虫類を呼ぶ植物を栽培し、幼虫・蛹・羽化の観察ができるようにする。 ・ 季節の野菜や果樹を栽培し 収穫の感動や季節感を味わう。
飼育	・ ミニフェンスを設置し、身近で触れ合いや観察ができるようにする。
砂場	・ 2種類の砂を準備し、性質や感触の違いに気づき、表現の楽しさを味わう。
土山	・ 土と砂との関係を知り、遊びの発展性が得られるよう砂場の近くに設置する。
樹木	・ はしごを取り付け、多くの幼児が木登りの楽しさが味わえるようにする。
ベンチ	・ 友達と一緒に休息や自然の風の心地よさが得られるよう、ベンチを設置する。
池	・ 小さな生き物が生息するよう周辺の環境を整える。 ・ 地中と水中の植物が比較出来るように水草を植える。

(2) 自然環境年間計画表

	4月～5月中旬	5月中旬～7月	9月～10月中旬	10月中旬～12月	1月～3月
草 花 の 栽 培	サルビア	密をすう・花びらで遊ぶ	種取り	種まき	
	金魚草	花で遊ぶ		種まき	
	白粉花		色水・種で遊ぶ		
	朝顔	種まき	色水	種取り	
	ホウセンカ	種まき	色水・種で遊ぶ・種取り		
	黄花コスモス	種まき	色水	種まき	
	インパチェンス	種で遊ぶ 幼虫	色水	種まき	
	トウワタ		幼虫・蛹・蝶の観察		
	スミレ		幼虫・蛹・蝶の観察		
	ヒマワリ	種まき		種取り	
	チューリップ				球根を植える
	ペチュニア			種まき	
	シロツメ草	花で遊ぶ		花で遊ぶ	
	ゲットウ	花・種で遊ぶ	収穫祭の皿として		ムービー作り
樹 木	カシノマル	ブランコ・木登り・鯉捕り・実で遊ぶ・ターザンロープ			
	イスノキ	木登り・木の実で遊ぶ			
	クワ	実の試食			
	ザクラ	実の試食			花見
	クワアハバ		実の試食		
	モモタマナ		鯉捕り	実や葉で遊ぶ	
	ホルトノキ	葉で遊ぶ	鯉捕り	葉で遊ぶ	
	カスラ	植える		焼き芋・天ぷら	
野 菜	ネギ・ヨモギ		お好み焼き	お月見団子	みそ汁パーティー
	ミニトマト	試食		苗を植える	試食
	オクラ	苗を植える	和え物・天ぷら	天ぷら	種取り
	ピーナッツ	苗を植える	収穫		
	ジャガイモ・人参・玉葱			種まき	カレーパーティー
	ハツカ大根			種まき	みそ汁パーティー
	オタマジャクシ	捕まえる・飼う(カエルになる過程を観察・放す)			
池	ヤゴ		捕まえる・飼う(トンボになる過程を観察・放す)		
	カエル	捕まえる・観察・放す			
	ホテイアオイ	茎・葉・つぼみ・花の観察			
	ウォーターキャベツ	茎・葉			

Ⅲ 保育実践

1 活動名

友達と一緒に自然と触れ合って遊ぼう

2 活動設定の理由

(1) 教材観

幼児は興味・関心をもったり、不思議に思ったことは、自分から触れたり扱ったりして積極的にかわっていく。そのかわりの中で色々な気づきや発見が生まれ発達が促されていく。興味・関心に結びつく驚きや不思議さが得られやすい自然環境は豊かな心を育む上で欠かすことのできないものである。例えば、小動物に親しむ中から命を大切にしようとする心が育ってくる。命を維持するためには、餌を与えることの必要性を知り、食草を植え、責任感をもって世話することの大切さを知る。それらのことを友達と行ううちに感動の共有が図られ、友達がより身近になり楽しく世話をするようになる。その中で友達の考えにふれ、楽しく遊びを進めるために自分の気持ちを抑制することも起きてくる。このように幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の不思議さ、面白さ、美しさに直接触れる体験を通して幼児の心が安らぎ、豊かな心が育っていくものと考え。そこで、園内の自然環境を工夫し、多くの幼児が目に向け、興味・関心を持って十分にかかわって欲しいと願い「友達と一緒に自然と触れ合って遊ぼう」を取り上げた。

(2) 幼児観

多くの幼児が、飼育動物に関心を示し、触れ合い、進んで世話をしている。アヒルやチャボの動きに驚いたり、歓声を上げたり、自分の仲間として会話をする幼児もいる。特にウサギの赤ちゃんは人気があり、「ふわふわしている」「かわいい!」「次は僕にも抱かせて〜」「かして〜」等、ウサギを媒体に感動や思いの伝え合いが見られる。しかし、無理に餌を与えようとしたり、いやがるウサギを長時間抱いている幼児がみられるので一緒に遊んだり、世話をする体験を通して、動物の気持ちになっていたわりながら遊べるよう援助していききたい。砂場においては、一人の遊びが他児に伝わり、次第に遊びに参加する仲間が増え、アイデアを出し合いながら砂や水の感触を楽しんだり、工夫したりしている。草花や木の実を利用した色水遊びでは、不思議さや面白さを発見し楽しんでいる。池や花壇の小さな生き物を捕まえ観察したり、羽化するのを楽しみにしたりしながら、蛹を見守る姿も見られる。しかし、砂や土に抵抗を感じる幼児や世話の仕方がわからず、大切に扱えずにいる幼児、室内遊びに偏りがちな幼児もいるので、内面理解や自然環境の工夫を図りながら、自然の不思議さや美しさに気づかせていきたい。

(3) 指導観

幼児が自然環境に主体的にかかわるには、情緒の安定感をもってかかわれるようにすることが大切である。そのためには、日頃からスキンシップを図り、幼児を見守っていくことが重要である。常に幼児の行動から内面理解を行い、興味・関心に基付いて自然環境に関わっていけるよう環境構成をしていく必要がある。幼児と行動を共にしながら好奇心や探求心がもてるよう言葉かけをしたり、色々な気づきや発見に結びつくまでのたっぷりの時間や場所の確保をしてあげる必要がある。又、感動の共有、共感、思いの交流が図れるよう友達を作り、色々な体験が出来るようにして援助していく必要がある。その際、保育カンファレンスを通して幼児理解を深めると共に自然環境の工夫、援助のあり方を探りながら心豊かな幼児の育成にあたりたい。

3 保育の目標

- ・友達と一緒に遊ぶ中で、自然の不思議さや面白さに気づき、大切にしたり思いやりの心をもつ。

4 保育の視点

- ・自然と触れ合えるような環境の工夫
- ・自然の不思議さ、面白さ等に気づかせるような援助の工夫

5 検証保育と保育カンファレンス

月日	ね ら い	幼児の活動	教 師 の 援 助
6/10	・自然に触れて 友だちと遊び を楽しむ。	・飼育動物と遊ぶ ・虫取り ・木登り ・草花で遊ぶ	・発見や感動を受け止め、共感したり、幼児間の気持ちのつながり等を大事にする。 ・幼児の反応や気づきを一緒に考え、命の大切さを知らせる。 ・幼児自身が安全に気をつけて木登りができるように援助する。 ・イメージが広がるよう幼児から引き出したり、紹介したりしながら植物に親しみを持たせる。 ・自然に関する絵本や図鑑を目のつく場所におく。
6/16	・友達と一緒に 土、砂、水の 感触を楽しむ	・土、砂遊び ・水遊び	・水や土の感触を味わわせ、次第に工夫して遊べるよう援助する。 ・発見や感動を大切に受け止め、共感する。 ・安全面に気をつける。
6/24	・夏の遊びを楽し む	・七夕の製作 ・水遊び 色水 シャボン玉 プール ・虫取り	・工夫しているところを認め、作る楽しさ、工夫する面白さを味わえるようにする。 ・カバマダラの幼虫、蛹の変化を観察したり、幼児の発見や感動に共感する。 ・自分の思いだけがかかわろうとするのではなく、いたわりの気持ちを持って遊べるように配慮する。
7/1 本時	・友達と一緒に自然 環境に親しみそ の不思議さ、面白 さ等に気づき、い たわったりして遊 ぶ楽しさを味わう	・シャボン玉遊び ・色水遊び ・虫取り ・小動物と遊ぶ ・土、砂遊び ・木登り	・感動体験が出来るよう色々な教材、教具を準備する ・幼児なりの工夫や意欲を認める。 ・その場に応じた援助をする。 (面白そうだな・不思議だな・命の大切さ) ・教師も一緒に遊び、興味のない子への働きかけをする。 ・思い思いに楽しんでいる姿を見守り、安全面に気をつける。
保 育 カ ン フ ァ レ ン ス (抜粋)			
第 一 回	<幼児理解について> Aさんの気持ちになってみよう 5人の男の子が1匹のセミを囲み、試行錯誤をしている。4人が見守る中ようやくBさんがセミを捕らえた。4人はBさんに駆け寄り「僕が虫かごに入れるー」とそれぞれが主張したが、Bさんは夢中でセミを虫かごに入れてしまった。思い通りにならなかった4人の中の一人、Aさんが、「セミは、1週間しか生きられないんだよ」とぼつりと言った。Aさんはなぜ、そう言ったのか。その時のAさんのまなざしや表情はどうだったのか。周りの幼児の様子や日頃のAさんの虫とのかかわりの面から話し合いが進められた。その結果として、セミに触れたいという強い思いからセミに触れられなかった悔しさが伺える。セミの生態を話しながら精一杯感情のコントロールをしていたことが考えられる。虫への興味・関心が高く、生態にも詳しいAさんである。実際の虫との出会いとその時の感情体験が成長へのステップになって欲しいと願った。		
第 二 回	<環境の再構成について> 飼育小屋のミニフェンス設置 飼育小屋が狭く、子ウサギが生まれたのを機会にミニフェンスを設置することになった。小動物との触れ合いを大切にしたい、かかわり方に問題のある幼児には触れ合いを通して、思いやりをもって接することに気づかせたいと教師の思いがある。ミニフェンス設置後の教師の援助について、幼児の姿から話し合いを進めることにした。ミニフェンス設置前は、ウサギとの触れ合いは抱っこが中心であった。ミニフェンスを設置したことで、身近でウサギの動きが見られるようになり、観察を楽しむ幼児が増えた。ウサギの動きをじっくり見て、新たな発見や感動を自分なりに表現し合ったり、共感したりしながら楽しさがふくらんでいくのが感じられた。全員がミニフェンスの外、同じ高さ、同じ距離から観察することにより、幼児同士の心が互いに結びついて、友達関係の広がりが見られるようになった。環境は固定的なものではなく、常に幼児の発達に沿って再構成していくことが大切であることが話し合われた。		
第 三 回	<教師の援助のあり方について> Y教師の保育反省の中から 教師の援助にはいろいろある。どのような援助を行うかは、常にその日のねらいを意識して判断することが重要である。幼児と共に生活する中で教師自身が自然の不思議さ、面白さ等に感動し、幼児に伝えることも大切である。豊かな心を育むためには、幼児が心を動かしている出来事を共に感動できる教師の感性が求められる。		

6 本時の保育展開

幼児の姿	・雨天時に園内探検し、雨音をかっぱや傘を受けて楽しむ様子が見られる。 ・虫捕り、砂遊び、ままごと、スケーター遊びと気の合う友達を誘い合って遊びを進める姿が見られる。捕った虫を逃がしてあげようと優しく接する幼児もいる。 ・個人鉢の百日草の花が咲いたことを伝え合ったり、アンテナ虫を見つけて教師や友だちに知らせる幼児もいる。	
ねらい	・友達と一緒に自然環境に親しみ、その不思議さ、面白さ等に気づき、いたわったりして遊ぶ楽しさを味わう。	内容 ・友達と一緒に思いを出し合いながら、好きな遊びを楽しむ。 ・思いやりやいたわりの気持ちに気づく。
8:15	○登園 ・挨拶をする。 ・身の回りの始末をする。 ・当番活動をする。	・一人一人とあいさつを交わしたり、スキンシップを取りながら体調や気持ちを受け止める。 ・水やりをしながら花や野菜の生長を喜び、幼児の発見や気づきを一緒に喜ぶ。 ・途中で投げ出さないよう、頑張っている姿を認めたり、励ましたりしながら一緒に園庭の掃き掃除や動物の世話をする。
9:10	◎自然と触れ合って遊ぶ ○シャボン玉遊び ★感動体験ができるように、いろいろな材料を準備する。(竹、モール、うちわ、ペットボトル等) ★遊びの様子を見ながらいつでも補充できるように、シャボン玉液を準備しておく。 ★用具は自由に使ったり、片付けたりがしやすいように箱やかごを用意する。 ◆吹きかたを工夫したり発見したりした幼児の意欲を認め、共感する。 ◆教師も一緒にシャボン玉遊びを楽しむことで、興味を示さない幼児への働きかけをする。 ○色水遊び (白粉花、黄花コスモス、ホウセンカ、草の葉・実) ★色の出方に気づいたり、美しさに感動できるように容器の色に配慮する。 ★遊びが楽しめるように、テーブルやベンチの配置を幼児と共に考える。 ★ごっこ遊びへの発展が考えられるので、ストローやスプーン、コップ等、を目の着く場所に提示しておく。 ★用具は自由に使ったり、片づけたりがしやすいように箱やかごを準備する。 ◆いろいろな色の出方が違うことに気づかせ、幼児の気づきに共感する。 ◆色水の作り方等、幼児なりに工夫しているところを認める。  ○小動物と遊ぶ ★ミニフェンスを設置し触れ合って遊べるようにする。 ◆ウサギやニワトリの気持ちになって、いたわりながら遊べるように声かけをする。 ◆発見や驚きに共感する。 ◆安全面に気を付ける。 ◆遊んだ後は、石けんで手を洗うよう声かけをする ○片づけをする ◆教師も一緒に片づけをしながら、みんなで協力してできるよう声かけをしたり、きれいになると気持ちが良いことを知らせたりする。	★環境構成 ◆教師の援助 ○虫取り (セミ、蝶々、カバマダラ、幼虫、オタマジャクシ、トンボ、テントウ虫) ★補虫網や観察ケースは必要に応じて使用できるように、置き場所に置く。 ★虫への興味・関心が広がるよう、目のつきやすい場所に図鑑や絵本を用意し、一緒に考えたり、調べたりする。 ◆一緒に虫探しをしながら、虫が捕れた喜びや逃げられた悔しさに共感したり、捕れた虫を紹介する。 ◆教師自身も探求心をもち、驚き、疑問を投げかけたりする。 ◆虫を捕まえたり、観察している様子を捉え、その場に応じた援助をする。 (面白そうだな・不思議だな) ◆捕った虫はそのままにせず、飼育したいとの思いを認めながら、命の大切さも知らせる。 ◆虫に詳しい幼児の声をとり上げて、伝え合うようにする。 ◆安全面に気を付ける ○土、砂遊び (だんご、ままごと、川、ダム、池、トンネル、基地) ★用具は自由に使ったり、片付けたりがしやすいようにかごを用意する。 ★友達と協力して遊べるよう、大きめのバケツを準備する。 ◆作りたいものが実現できるように見守り、アイディアを引き出したり、工夫を認める。 ◆トラブルが生じたら、まずそれぞれの気持ちを充分受け止め、相手の言い分もよく聞き、自分の考えも話すように促す。 ◆片づけが積極的にできるよう励まししながら、協力する大切さを知らせる。 ◆遊んだ後、手足をうまく洗えない幼児には、手伝いながら洗い方を知らせる。  ○木登り (ターザンロープ、ロープブランコ) ◆幼児自身が安全に気をつけながら登れるように、援助する。 ◆思い思いに楽しんでいる姿を見守りながら、安全面に気を付ける。
10:30	○話し合いをする ・楽しかった事、気づいたこと等について話したり、聞いたりする。	・今日の出来事を話し合い、一緒に考えたりしながら明日への遊びの意欲につなげるようにする。
評価	・自然の不思議さ、面白さ等に気づき大切にしようとしていたりして遊びを楽しんでいたか。	

7 保育の視点の検証

(1) 自然と触れ合えるような環境の工夫

- ① 幼児の生活や発達を見通して、季節の草花を精選し栽培したことで、幼虫や蝶と触れ合う姿が見られた。又、草花を利用して色の出し方を工夫しながら、色水遊びを楽しむ姿が見られた。
- ② 色水遊びやシャボン玉遊びの教材、教具を精選することにより「本当のジュースみたい」「飲みたい」と様々な幼児の声が聞かれ、積極的に取り組む姿が見られた。
- ③ 土山や砂場においては、設置場所や素材の工夫をすることにより主体的に取り組み、試したり、工夫したり、活動の広がりが見られた。
- ④ ガジュマルの木に、はしごを取り付けたことで多くの幼児が木登りを楽しんでいた。

(2) 自然の不思議さ面白さ等に気づかせるような援助の工夫

- ① 教師が自らシャボン玉遊びを楽しみ、いろいろな方法でやってみせることにより、幼児の活動の広がりがみられた。「大きいシャボン玉は飛ばない」と滑り台の上から飛ばしたり、手でシャボン玉液を掬い、「魔法の手だー」「虹みたい」と気づきや発見、感動を伝え合う場面が見られた。
- ② カバマダラの幼虫を地面で見つけた幼児が「かわいそう」と言いながら食草に帰し、いたわる気持ちを感じられた。又、色水を作る過程で草花を大切に扱う様子が見られた。
- ③ ティーム保育を行うことで、活動の各場面においての幼児の気づきや発見を受け止め、共感し、疑問を投げかけたり、全体に広げたりする援助ができた。

④ 保育カンファレンスの実施（抜粋）7月1日Y教諭の保育反省を基に教師の援助のあり方について探る

Y教諭：砂場でホースの水圧で穴があき、偶然の出来事に幼児達が歓声を上げていた。水遊びになつては困ると思い、幼児の感動に共感する援助ができなかった。幼児の活動に流され、自分の思いを伝えられず援助に戸惑うことがある。

R教諭：でも、援助に戸惑い見守ることで、活動の広がりが見られたりするよね。

Y教諭：喜んでいたのでこれで良いのかな、とも思った。

S教諭：喜んでいれば良いのかな？

Y教諭：私って、喜んでいいるからそれで良いって思うことが多い。

S教諭：今日のねらいはどうしたの？

Y教諭：私はそこまでは考えていなかった。

T教諭：私たちは子供の遊びに流されることがあるよね。

S教諭：帰りの会でも、その日のねらいを基に話し合いを進めることが大事よね。

【考察】 幼児は偶発的なことから発見や驚き、感動したりする。特に自然環境におけるこのような出会いは見逃さず大切にしたいと思う。しかし、偶発的な場面では援助のとまどいも多い。援助で戸惑った場合は、判断の基準として、ねらいを最優先することが大切であることが話し合われた。

IV 研究の考察

幼児理解を深め、心豊かな幼児の育成をめざした自然環境の工夫と援助のあり方を探る。

1 幼児の姿と教師の願い

＜Sさんの変容＞ カバマダラの幼虫に触れるようになったよ、僕ってすごいでしょ！

＜Sさんの姿と教師の願い＞ブロックや油粘土で乗り物を作るのが得意な子である。図鑑が好きで科学的な知識も豊富だが、戸外に出て自然とかかわって遊ぶ姿はあまり見られない。マイペースで命令口調のため友達とのトラブルが多い。図鑑が好きなことから自然環境とのかかわりを通して、自分の気持ちを素直に出しながら友達の思いに気づき、一緒に遊びを進めていく楽しさを味わわせたい。

2 幼児の変容と教師のかかわり

Sさんの様子

入園当初 ＜うさちゃん大好き＞

室内での一人遊びが多いが、時々戸外に出て「うさちゃん」と言いながらウサギを追いかけている。

5月 ＜ロープブランコがこわーい＞

ロープブランコに乗っている幼児を見て「僕も乗りたい」と言って来た。揺らして上げると「こわーい、こわーい」

◆教師の援助 ◎読み取り ★自然環境の工夫

◎ウサギとの関わりで、心の安定が見られる。

◆Sさんと一緒にウサギとの触れ合いを楽しむ。

★がじゅまるにロープブランコを取り付ける。

◆戸外遊びに誘う。

◎友達とのかかわりは少ないが目を向けるようになる。

◆興味を示しながらも怖がっているので、力を加減しながら揺らし、スリル感を共感する。

と言いながらも楽しそうである。

6月 <補虫網を準備したことから>

補虫網に興味を示し「僕も蝶々をつかまえたい」と蝶々を追いかける。

幼虫に興味を示すが怖る。手にとって見せると「おー」と悲鳴を上げる。

数日後 <僕ね、虫触れるようになったよすごいでしょ>と言いながら手の中の虫を見せてくれる。図鑑で調べ「これだ、これと似ている」「カバマダラって書いてある」と嬉しそう。他児にも教えている。

六月中旬 <蛹の色が変わったよ>

観察ケースを注意深く見るようになる。

「緑の蛹が白になっている」

「パタパタと音がして振り返ると蝶々々々になっていた」「蛹から脱いでくしゃくしゃの羽だ。くるくるして下の羽が傘みたい。面白ーい」「白の蛹がオレンジ色の蝶に変身した」と懸命に話す。

「蝶々ね、外の草に帰したよ」と蝶との一体感や優しさが感じられる

7月 <先生、見ていてね>

シャボン玉を飛ばして見せてくれる。「ゆっくり吹いたらフワーと大きいシャボン玉が出来た」「強く吹いたら小さいのしか出来ない」「ピカピカの透明で綺麗だよ」と、友達とシャボン玉を楽しんでいる。出来た喜びを共感すると「他の物でも作るー」と言ってペットボトルや空き箱で試している。

★幼虫・蝶・蛹の観察ができるように食草を植える。

◆目のつく場所に補虫網、観察ケースを準備する。

◆補虫網を渡し、一緒に虫捕りをする。

◆小さい幼虫を選んで「かわいいよ」と見せてあげる。

◎触れようとしなが好奇心いっぱいの瞳で見つめている。食草に帰し、いたわりの気持ちを示す。

◎虫に触れるようになったことから自信が伺える。

◆触れるようになった喜びを共感し、「どんな蝶になるのかな」と聞き、期待感を持たせる。

◆図鑑でわかった喜びを共感する。

◎幼虫への関心の高まりが見られる。Sさんの気づきに共感し「蛹の色は変わるんだね」と受け止める。

◎蝶の誕生に気づき、神秘的な不思議さ、面白さに感動しているようである。

◎懸命に話す姿から、注意深く観ていたことが伺える。

◆羽化した喜び、命の不思議さ、面白さを共感し合う。

◆Sさんの観察や優しさを帰りの会で紹介し、友達関係や虫への興味・関心を広げる。

★継続してテントウ虫の観察が出来るよう、引き続き食草を大切に栽培する。

★自然体験が楽しめるよう、ベンチを設置する。

◎色々な活動に興味を示すようになる。

★園庭の自然物を利用してシャボン玉遊びが楽しめるようにする。(竹・ゲットウ・桑・レモングラス)

◆「本当ね、シャボン玉出来たね」と喜びを共感する。

◎何度も試した後の成功の喜びが感じられる。

◎シャボン玉の美しさに感動している。

◎友達とかかわって遊ぶようになる。

★色水遊びに広がるよう、植物を精選して栽培する。

【考察】 図鑑を通してのこれまでのSさんの知識と身近に蝶や虫と触れ合える自然環境の工夫、教師の援助がSさんの自然環境に対する興味・関心を高めたと思われる。室内遊びに偏りがちのSさんだったが戸外にも目を向けるようになり、活動の広がりが見られた。直接体験での気づきや発見、感動を教師や友達と共感し合うようになり、虫に優しく接する姿や友達とかかわって楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになった。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・保育カンファレンスで具体的な事例を議題にすることで職員間の様々な情報や意見が出され、全職員が幼児を知る機会となり、一人一人の発達に沿った援助を心掛けるようになった。幼児も担任だけでなく、他の教師にも心を開き安心して活動する姿が見られた。
- ・保育カンファレンスの実施で自然環境の工夫と援助のあり方が深められ、多くの幼児が自然環境に親しむようになり感動を伝え合い、優しい心やいたわる気持ちが見られ豊かな心の育ちが見られた。
- ・飼育小屋の前にミニフェンスを設置したことで身近で小動物の観察ができるようになり、イメージを共有して表現遊びを楽しむ姿が見られ、自然環境の再構成が生かされた。

2 今後の課題

- ・豊かな心を育むためのよりよい援助ができるよう、更なる保育カンファレンスの充実を図る。
- ・幼児が主体的に関わる自然環境の見直しと安全面の配慮に努める。

<主な参考文献>

文部省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館	1999年
現代保育実践研究会	『保育実践事例集』	第一法規	1999年
西久保礼造著	『幼稚園の教育課程』	フレーベル館	1995年